

ためして漢方！

その28

めまい



Q 更年期の頃からめまいがありました。最近になって起き上がった時に目が回り、ひどい時は吐いてしまいます。ふだんからふわふわする感じが、頭が痛いこともあります。頭部MRIや平衡機能検査では異常がなく、西洋薬を飲み続けるのが不安です。何かよい漢方薬があれば教えてください。

(67歳、女性)

A めまいは臨床症状から、回転性めまい（良性発作性頭位めまい症、メニエール症候群など）、眼前暗黒感（循環器疾患など）、平衡障害（小脳変性症、薬物過量など）、浮動性めまい（パニック障害、前庭障害など）に分類できます。日常よく見かけるめまいは、多くが内耳にある平衡感覚をつかさどる三半規管の障害による末梢性めまいで、回転性でも非回転性でも、漢方治療のよい適応となります。しかし、脳梗塞や脳出血、てんかんが原因で起こる中枢性めまいは、もうろうとする、飲み込みにくい、ろれつが回らない、激しい頭痛がする、けいれん発作を起こすなどの神経症状を伴うことが多く、西洋医学による速やかな対応が必要です。

耳に原因がある末梢性めまいの多くは、漢方的に水滯として捉えられます。水滯とは体内における水分の代謝や分布に異常がある病態で、主に浮腫、口渇、尿量減少などの症状を現します。その他、瘀血（月経周期に関連

して生じる）、血虚（貧血に伴う）、気逆（のぼせやイライラに伴う）、気虚（倦怠感が背景にある）、気滯（抑うつ気分や息苦しさに伴う）など、めまいはさまざまな病態の一症候としても起こります。しかし、めまいを主に訴える場合は水滯であることが多く、他の症状に付随して生じるめまいの場合には、水滯以外の病態も疑う必要があります。

水滯によるめまいに用いる処方りょうの代表は**苓桂朮甘湯**で、末梢性めまいの第一選択と言ってよいでしょう。もしも食後の眠気などの胃腸虚弱のサインが明らかなら**半夏白朮天麻湯**にします。**五苓散**は水滯に対する代表的処方これいさんで、浮腫や尿量減少などがあれば選択します。顔色が悪く、体が重くて立ってられない人は**真武湯**の適応です。また、血圧が高くて脳血流低下しんぶとうが疑われる高齢者には**釣藤散**がよく効きます。その他、更年期障害に伴うめまいには一般に**加味逍遙散**を用い、体格が良ければ**女神散**も考慮します。のぼせてイライラが強い高血圧患者は**黄連解毒湯**にします。

あなたの場合、頭を動かした時にめまいが起こるので、良性発作性頭位めまい症が疑われます。検査で異常がないというので、まずは**苓桂朮甘湯**を飲んでみてください。

(新井 信)



煎じ薬のご案内

「煎じ薬」による漢方治療が可能です。*健康保険で処方できますので担当医にご相談ください

「煎じ薬」とは、★漢方薬の原料である生薬を細かく刻んで調合し煮出したものです

★お一人お一人の症状や体質に合わせた処方の選択が可能です

★生薬が持つ効能を余すことなく引き出せ、処方本来の薬効が発揮されます

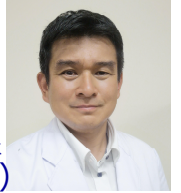
★液体なので薬効成分をすばやく吸収することができます

☺ コーヒーに例えると、「煎じ薬」は焙煎されたドリップコーヒー「エキス剤」はインスタントコーヒーのような違いです



漢方医学の基本理論

～気逆について～



すいぎやく おうぎやく

漢方医学では、生体は気血水の3つの要素で成り立つものと考え、日本では一般的にその失調状態としては、「気虚」「気逆」「気滯」「瘀血」「血虚」「水滯」の6つの病態を想定します。

気逆とは、目に見えないエネルギーで、本来全身を隈なく循環するべき「気」の流れが、乱れ逆流してしまう病態です。「気」は正常では体の中心部から末梢に流れたり、上半身から下半身に流れたりしていますが、それが乱れることで不快な症状が現れます。

気逆にはいくつかのパターンがあり、①腹から胸に何かが一気につきあがってきて動悸や息苦しさを生じ、更には頭痛や失神などを来すもの（奔豚気）②胸から喉・顔面につきあがり咽喉部の痞え感、顔面紅潮、咳嗽を来すもの（咳逆上気）③心窩部の不快感があ

り、胃液を吐くもの（水逆・嘔逆）

④四肢末梢から冷えや痛みが中枢側に広がるもの（厥逆・厥冷）⑤慢性的に顔がのぼせ足が冷えるもの（上熱下寒）⑥突然に顔が熱くなり発汗するもの、などがあります。

気逆の治療にしばしば用いられるのは桂枝と甘草のペアを含む処方です。桂枝と甘草は気の流れを整え、上に昇ってしまった気を降ろす作用があります。

冷えのぼせ、顔面紅潮、動悸感などの症状は現代医学的な診断がつきにくいことがあり、治療方法も限られます。気逆と理解し、漢方薬を上手に活用することで症状が軽減できることがあり、試みてよい治療法であると考えています。（野上達也）



鍼灸治療のご紹介 ～よく使用する経穴(通称:ツボ)～

東洋医学では異病同治という考えがあり、異なる症状でも同じ経穴を使用して治療をすることがあります。今回は使用頻度の多い経穴から「足三里」と「合谷」をご紹介します。

足三里：消化器疾患や運動器疾患に使うことが多く、膝の下のすねの上に突起した骨の下縁から外側指2本分のところにあります。鍼刺激を行うことで胃の動きを促進させるという報告があり、食欲不振や腹痛などの腹部症状に使用します。他にも前屈をすることで痛む腰痛、膝関節痛、下肢の筋肉痛などにも使用します。松尾芭蕉の『奥の細道』の一文には「三里に灸をすえて～」とあり、健脚を目的に使用されていました。

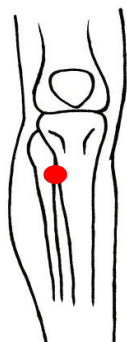
合谷：顔面部の症状に対する使用頻度が多く、手の甲側で、親指と人差し指を合わせてできるふくらみの中央にあります。疲れ目や充血、歯の痛み、鼻詰まり、顔面部の浮腫などに使用することが多く、その他にも、ばね指（主に母指と示指）や腱鞘炎、咽頭痛、肩こり、腕の痛みにも使用することがあります。

気になる症状やご質問などございましたら、お気軽にご相談ください。

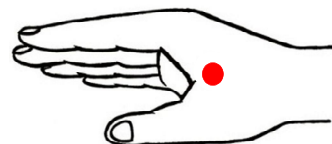
（山中一星、高士将典）



足三里
(あしさんり)



合谷
(ごうこく)



* 鍼灸治療は自費診療
(1回6,000円+税)となります